

〇・クroppと総ドイツ主義  
—— オーストリア国民論の系譜学 四 ——

梶原克彦

# 研究ノート

## 〇・クロップと総ドイツ主義 —— オーストリア国民論の系譜学 四 ——

梶原克彦

### 目次

1. オンノー・クロップー「ドイツ」史の敗者
2. クロップと総ドイツ性
3. クロップとカトリック系保守層
4. クロップとフランツ＝フェルディナント
5. クロップとブルクハルト
6. むすびにかえて

### 1. オンノー・クロップー「ドイツ」史の敗者

ヴァルター・ベンヤミンは『歴史哲学テーゼ』のなかで、歴史の認識が勝者の側によって立つことを述べている。そこで彼は、戦利品が「文化財」として遺産相続されている様子に、支配者による歴史的事象への感情移入の対象は、敗者ではなく勝者であると喝破した。そして「文化財」として何事もなかったかのようにそれを人々が見なすならば、支配者ならざる「一般の」人々の追体験も勝者の側に寄り添うことになるだろう。かくして歴史は勝者の側の認識を綴り、これが一般に受け入れられていくことになるが、こうした事態は「ドイツ」史の叙述においても指摘でき、「ドイツ」史の一大転機となった1871年のドイツ統一以後の歴史に関しても当てはまるだろう。19世紀の「ドイツ」史を見ると、実に様々な選択肢が存在したことが知られているけれども、ドイツ史の叙述はプロイセンによるドイツ統一を基盤とした小ドイツ的な国民国家を正統とする見解が長らく趨勢を占めてきた。そこでは、オーストリアは非

ドイツ国家として排除され、さらに第二次世界大戦後においては、旧来の「東欧」とのつながりも除外されていくこととなった。

現在、こうした流れに対して、プロイセン中心的歴史学派（*Borussian School of History*）や国民国家史観の批判や再検討が行われているけれども、「ドイツ」史の「敗者」に光があたることはなかなか難しいことのように思われる。「ドイツ」史をめぐるヘゲモニーと第二次世界大戦後の秩序をめぐるヘゲモニー、これらのもとでの歴史叙述のなかで、とりわけオーストリアを含めた「ドイツ」史や、オーストリアが主たる役割を果たすような「ドイツ主義」は、ややともすれば「歴史修正主義」の誹りを受けてしまう。一方、オーストリアにおいても「敗者」は存在している。とりわけ1933年以降の権威主義体制下でも唱えられた「総ドイツ主義（*Gesamtdeutsch*）」は、ナチス・ドイツとの対決と接近のなか、ナチス・ドイツの崩壊とともに、その権威を失墜させた<sup>2)</sup>。総ドイツ主義は、単一国家ではなく、緩やかな国家連合としての〈ドイツ〉を主張し、小ドイツ主義と大ドイツ主義との止揚としての立場であった。そこで想起された国境線は、現在のドイツとオーストリアを含み、かつ東方へと延びており、第二次世界大戦後の世界とは相いれないものだった。

こうした事態は、クルト・フォン・シュシュニックの総ドイツ主義に基づく独立維持論やライヒ論にも当てはまるが、そのシュシュニックが自らと同様に総ドイツ主義者と見なした人々、とりわけオンノー・クロップ（*Onno Klopp*: 1822-1903）について当てはまるだろう<sup>3)</sup>。オンノー・クロップの名前が現在、ドイツ史の潮流を語る際に言及されることはまずない。ところで、シュシュニックが総ドイツ主義者と目した人物にはカトリック系の歴史家ヨハネス・ヤンセン（*Johannes Janssen*）やコンスタンティン・フランツ（*Konstantin Franz*）の名前もあるが、フランツについては日本においても板橋拓己氏の論考が存在しており、ドイツ語圏などにおいても研究蓄積がある<sup>4)</sup>。これに対して、クロップに関するまとまった邦語での研究は管見の限り見当たらない。またドイツ語圏や英語圏において研究状況は相対的に進捗しているとはいえ、フランツに対する関心とは対照的に、クロップについてはそれほど蓄積があるわけではない。クロップの伝記は彼の死後、1907年に息子であるウィアールト・フォン・クロップ（*Wiard von Klopp*）の手によって出版され、これはのちにカトリック系の歴史家であるフランツ・シュナーベルの増補改訂を受けて1950年に再び出版された<sup>5)</sup>。このシュナーベルによる伝記のほかにもいくつかのクロップに関する論考は登場

したけれども、この後に登場した研究書は現在に至るまでごく僅かである<sup>8)</sup>。また彼の名前をドイツ史やオーストリア史の概説書で目にすることも稀である。もっともハインリッヒ・アウグスト・ヴィンクラーは名著『西方への長い道：ドイツ史 (*Der lange Weg nach Westen: Deutsche Geschichte*, 2000)』において、プロイセンによるドイツ統一の関ヶ原ともいうべき普墺戦争の叙述に際し、敗れたオーストリアのみならず、政治信条の点でも敗者となった人物たちを幾人が取り上げており、そこでわずかな紙幅がオンノ・クロップに割かれている。そこでは「1866年の敗者には、ルター派の保守正統派も含まれていた。このなかには、東フリースラント出身の歴史家でありジャーナリストでもあったオンノ・クロップがいた。彼は大ドイツ主義的な心情の持ち主で、ハノーファー系ヴェルフ家の忠実な支持者であった。1866年、彼の国王が〔プロイセンによるハノーファー併合によって一棍原〕王位を剥奪されてオーストリアに移ったとき、彼もまたそれに従い、やがてその地で七年後、カトリックに改宗している」とのみ記されている<sup>9)</sup>。クロップの同時代にあって、彼の論敵であったドロイゼンやジーベルらのこれまでの歴史学における取り扱いに鑑みれば、クロップの存在は「ドイツ」史をめぐる潮流の中で、ほとんど無視されているといってもよいほどだろう<sup>8)</sup>。

## 2. クロップと総ドイツ性

もとより、現在の歴史叙述のなかで傍流だからといって、当時もそうだったという訳ではない。1903年8月9日に彼が死去した際、オーストリアの数々の新聞がその死を大きく取り上げ<sup>9)</sup>、国外の新聞もまたその死を報じたものだった<sup>10)</sup>。またクロップを取り巻く政治状況やその人間関係に鑑みるに、彼は「ドイツ」史を考える上でも重要な人物として浮かび上がってくる。とりわけ、彼のドイツ観と歴史観の性格、そしてこれが他の人々に与えた影響は、以下の理由から、より詳細に検討されるべき対象であると思われる。第一に、クロップが所属したハノーファーは、プロイセンとオーストリアとも異なる「第三のドイツ」としての位置づけを持つ、現代の研究でも注目される領邦である<sup>11)</sup>。その経験が単一国家ならぬ国家連合としての、ライヒとしてのドイツというイメージにどのように繋がっているのか、この点は「連邦制的国民」などの議論とも合わせて吟味すべきテーマであると思われる。この点について、例えば大戦

間期において、ハインリッヒ・フォン・スルピクがクロップの思想業績を高く評価し、そこに分邦的であつライヒの全体性を思考する「ドイツらしさ」を見て取った。

カトリック-大ドイツ的、そしてドイツ分邦的な方向性をもった歴史編纂は、全体的に言って、プロテスタント-小ドイツ的実利主義的なドイツ史の攻撃的歪曲に対抗するものであり……かの三つの本質的要素、すなわち、大ドイツ的・ドイツ分邦的な要素、オーストリアに好意的な要素、そしてカトリック-戦闘的な要素は、元をたどればオンノー・クロップという人間に合流する。……ドイツ人の〔東フリースラント人としての〕個別的な精神から大ドイツ性へと、部族的な性質 (Stammeswesen) から旧ライヒ思想へと、彼の道は展開した。……彼の『プロイセン王フリードリヒ2世とドイツ国民』(1860年)は、ホーエンツォレルン家に、旧ライヒ滅亡の責任を負わせ、ドイツの中小の諸国に、プロイセンの征服欲、国内における強制的なシステム、プロイセンの軍国主義についての警告たらんとするものである。……1866年というドイツの運命の年の前、部族の本質の保守的、大ドイツの連邦主義者にして旧帝国の信奉者として、双方のドイツの大国の善良な関係を熱望したが、しかしプロイセンはあらゆるフリードリヒ二世時代の要求を断念しなければならぬ、とされた。賽がオーストリアに不利に落ちた時、深い痛みが彼を襲い、皇帝フランツ=ヨーゼフとその国家には厳しい意見が向けられた。……彼は全身全霊をあげて、オーストリアのドイツ国(Deutschland)への再加盟を要求し、フランスとオーストリアとの対プロイセン同盟を要求したのであり、カトリック的な普遍主義と特別なオーストリア国家理念しか知らないオーストリア国粹主義(Nurösterreichertum)には満足することはできなかった。『木がその根っこを否定することができないのと同じように、オーストリアはドイツ国との関係を断つことはできない』。彼は、オーストリア=ハンガリーの〔プロイセン主導の〕ドイツ・ライヒとの同盟に敵対し、ドイツ第二帝国(deutsches Kaisertum)の敵対者であり、自由主義とナショナリズムの敵対者であった。……このきわめて精力的で、非常に綿密な研究者は、ホイサーのような彼の憎んだ小ドイツ主義的歴史家と同じく、非党派性からは程遠かった。敵は、プロイセンに敵対的でプロテスタントを敵視する傾向を弾劾することによって、あるいは彼の不可欠な諸作品を黙殺することによって、報復した。しかし疑いえないのは、性

格のはっきりした人間の、無条件の反プロイセン主義者と改宗者への展開は、その源泉を深い真理への意志に有していた、ということであり、彼は強固な道徳的な正義観と強固なナショナルな気質を抱いており、結果から判断することを拒絶した、ということである。仮に「資料をして語らしめる」という彼の方法がヤンセンがそうであったように限定されたものだとしても、しかし、とりわけ、……ハプスブルク家のライヒとの歴史的関係の解明をめぐる彼の業績は重要である。また敗者の側における好戦的な文筆家として、かれは敬意に満ちた追憶を受けるに値する<sup>12)</sup>

こうしたスルピクの判断には、彼自身の総ドイツ観が投影されてもいようが、オーストリアの独自性・固有性を説きつつも、オーストリア孤立主義を主張するわけではなく、そしてまた「ドイツ」を画一的・集権的ではなく分邦的・国家連合的に把握する点で、総ドイツ主義の特徴が集約されており、クロップの思想が持つ重要性が理解されよう<sup>13)</sup>

### 3. クロップとカトリック系保守層

第二に、彼が切り結んだ人間関係、とりわけカトリック系保守派との人脈には、カトリック社会改革運動や保守派の中心人物が含まれていた。例えば、知遇を得た人物の一人がカール・フォン・フォーゲルザンク (Karl von Vogelsang) だった。19世紀後半のオーストリアにおけるフォーゲルザンクの活動は、同国のカトリック社会改革運動の嚆矢であり、帝政末期から大戦間期におけるキリスト教社会党の動きや職能身分制国家思想に多大な影響を与えたものだった。クロップとフォーゲルザンクとの近い関係は、クロップの息子であるウィアールトとフォーゲルザンクの娘が結婚したことで姻戚となり、さらにウィアールトがフォーゲルザンクの伝記を記すなどその教説の普及に努めたことから、家族ぐるみのそれであったことが察せられる。従来、フォーゲルザンクの思想や行動については、カトリック社会運動の観点から研究がすすめられ、こうした動きと1930年代のオーストリアにおける職能身分制国家との関連についても考察が行われてきた<sup>14)</sup> 一方、この職能身分制国家の対外的ビジョン、あるいはカトリック改革運動とそれとの関連については、例えばカール・シュミットの

それについて進められているような研究との比較で見た場合、それは今後の課題であるように思われる<sup>15)</sup> 1930年代のオーストリア職能身分制国家の知的源流として、いわば盾の両面の関係にあるクロップとフォーゲルザンクについて両者の関係と共に、特にクロップが対外的ビジョンに関して後の世代に与えた影響を理解すれば、総ドイツ主義の理解が一層進むと考えられる。

#### 4. クロップとフランツ＝フェルディナント

第三に、クロップは皇位継承者フランツ＝フェルディナント大公の幼少期に6年以上にわたりその家庭教師を務め、その思想形成に多大な影響を与えたことが知られている<sup>16)</sup> オーストリア＝ハンガリーは19世紀後半には民族問題を抱えることになり、それだけに民族問題に対する処方箋が数々提示された。その中に様々な帝国改編案の提示があり、社会民主党を中心とするグループが州と個人の「二重の自治」を基盤とした民族連邦制の導入を模索したり、イグナーツ・ザイペルのようなカトリック系保守派の側から従来の領邦自治に個人レベルでの民族自治を組み合わせた計画が示されたりした<sup>17)</sup> フランツ＝フェルディナントを中心とするいわゆる「ヴェルベデーレ・サークル」においても帝国の再編成に関する議論が重ねられ、そこからは、例えばオーレル・C・ポポヴィッチ (Aurel C. Popovic) の「大オーストリア合州国 (Die Vereinigten Staaten von Groß-Österreich)」や第一次世界大戦後にはミラン・ホジヤ (Milan Hodža) の中欧連邦構想などが登場した<sup>18)</sup> フランツ＝フェルディナント自身に関しては、ハンガリーとの二重制からスラブ系諸民族との妥協への移行 (三重制) という指摘、結局二重制の支持に立ち返ったという説、などその構想については様々な指摘がある<sup>19)</sup> 帝政末期から大戦間期における多民族国家論や広域秩序論を考えていく上でも、フランツ＝フェルディナントの構想とクロップの思想やその影響について、より具体的な検討を重ねていく必要があるだろう。

#### 5. クロップとブルクハルト

最後に、クロップの思想は、とりわけそのプロイセンに対する姿勢という点で、『プロイセン王フリードリヒ2世とドイツ国民』を通じて、ヤーコブ・ブルクハルト

に影響を与えていた。クロップはフリードリヒ大王時代のプロイセンによる対オーストリア戦争を、1866年の普墺戦争を通じて追体験しつつ、この作品をしたためたのだが、同時代人であったブルクハルトはその著作から多くの抜粋を行った。この点については、ブルクハルトの伝記をものしたヴェルナー・ケーギの論考で指摘されている。「ブルクハルトのフリードリヒ大王像は、オンノー・クロップがなくてもたいして変わった結果にはならなかったろう。彼のフリードリヒ像は、もっと古い基盤に立っていた。しかし、オンノー・クロップはブルクハルトに多くの点で確認と同意と証拠とをもたらした。フリードリヒ二世に関するクロップの著書は、その再版—ブルクハルトはそこから抜粋した—において、1866年の戦争の結果を描写しているのであるが、この本のことは別にしても、オンノー・クロップの人間もまた興味がある。たぶんブルクハルトは、人としてのクロップについて、ノートや手紙からうかがわれるよりも多く知っていたのだろう。……彼はぎっしりと書きこまれた三十六枚という大量の抜粋をおこない、その中で、彼はフリードリヒ二世に関するオンノー・クロップの考え方をたどった。こうした栄誉は、おそらく十九世紀の他のいかなる歴史家にも与えられていない<sup>20)</sup>」。ブルクハルトがこのようにクロップに共鳴したのも、プロイセンのヘゲモニーの下、画一化されることに対する危機感を共有し、小国スイスの存在を維持せんとしたためだった。スイスにあっても、ヨハン・カスパール・ブルンチュリのようにドイツ国民国家思想に賛同し、「国民的大国家への発展を肯定<sup>21)</sup>」する者もあった。しかしこの流れに対して、ブルクハルトは、スイスのような「小国家は、強大な中央集権的<sup>ライバル</sup>な競争者にくらべて権力手段において欠いているものを、人間的・文化的そして純粋に政治的な価値という分野で百倍にも取り返す」という確信を抱いていた。そしてこうした小国が存在し、多様性を保ちながらも緩やかなまとまりを形成している政治体として、「ブルクハルトがその文化的価値を承認し、飽くことなくそれを讃える唯一の巨大国家は、ローマ帝国であり、カルル大帝によるその改新である」。そして「近代国家とは対照的に、それが『あらゆる瑣事にたいする綿密きわまる監視』、『いっさいがっさい立ちいつての支配』、『精神的方向の強要と監督』、こういったことを全く知らなかったことは、ブルクハルトにとっては、ローマ帝国の<sup>はまれ</sup>誉である」とケーギが指摘するとき、小国の存立と緩やかな国家連合体であるライヒの存在とがコインの裏表の関係にあり、そうした両者に対する志向性が近代国家の潮流に対する反発を梃としている様子が確認できる。この点において、ブル



クハルトの姿勢は総ドイツ主義者としてシュシュニックが唱えた小国論とライヒ論との組み合わせからなるオーストリア像に著しく接近し、いわばクロップは両者の公分母となっている。もっとも、シュシュニックはクロップの名前を自身と同じ総ドイツ主義の系譜に加えたけれども、大戦間期にウィアールト・フォン・クロップから「オンノー・クロップの伝記」によるオーストリア意識の促進を提案されたとき、これに共感を示すことはなかった<sup>29)</sup>この理由はマツインガーの研究でも明らかにされておらず、シュシュニックにおけるクロップ受容についても検討の余地が残されているだろう。

## 6. むすびにかえて

本稿では、従来注目を集めてこなかったオンノー・クロップに焦点を定め、その人間のつながりの点から、傍流と見なされてきた彼の思想と行動の重要性を再確認する作業をおこなった。そこから明らかになったのは、彼の思想と行動は、総ドイツ主義から見た「ドイツ」史の再構成を進める上で、看過できないものであるということである。またクロップの思想は、大戦間期オーストリア、とりわけ1933年から1938年の職能身分制国家における国際秩序イメージを考える上でも、重要性を帯びているといえよう。従来の研究では、クロップの大ドイツ主義的発想、反プロイセン主義、ライヒへの志向性などは確かに言及されてきたものの、それが後の時代にどのような影響を与えたのか、という点についてはほとんど明らかになっていない。クロップの思想と行動、さらにはその大戦間期への影響という視点での考察を今後の課題とすることを確認しつつ、筆を擱くこととする。

\*付記：本稿は、平成26～28年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「保守政党の国際比較」(研究課題番号：26380168；研究代表者：阪野智一)、ならびに平成26～28年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「移民・外国人の包摂と排除に対する「国民意識構造」に関する国制史的考察」(研究課題番号：26380172；研究代表者：梶原克彦)による研究成果の一部である。

注

- 1) ヴァルター・ベンヤミン (野村修訳) 「歴史哲学テーゼ」(歴史の概念について)、今村仁司『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波現代文庫、2000年、61-62ページ。
- 2) 第二次世界大戦における総ドイツ主義の流れやオーストリアの「ドイツ」らしさと国民意識に関する議論については、Garnot Heiss, *Pan-Germans, Better Germans, Austrians: Austrian Historians on National Identity from the First to the Second Republic*, in: *German Studies Review*, 16, 1993, p. 421 ff.; Harry Ritter, *Austria and the Struggle for German Identity*, in: *German Studies Review*, 15, 1992, p. 124 ff., 参照。
- 3) Kurt von Schuschnigg, *Ein Requiem in Rot-Weiß-Rot*, Zürich, 1946, S. 172. 同じ箇所ではその他に、イグナーツ・ザイベル、リヒャルト・クラリク (Richard Kralik) の名前が挙げられている。
- 4) 参照、板橋拓己『中欧の模索－ドイツ・ナショナリズムの一系譜』創文社、2010年、39-69ページ。
- 5) Franz Schnabel (Hrsg.), *Wiard von Klopp: Onno Klopp. Leben und Wirken*, München 1950. 本書の書評にはハンス・コーンによるものもある。Hans Kohn, *Onno Klopp: Leben und Wirken. By Wiard von Klopp. Edited by Franz Schabel. (Munich: Schnell & Steiner. 1950. Pp. xii, 271.)*, in: *The American Historical Review*, Vol. 57, No. 1 (Oct. 1951), pp. 158-160.
- 6) 纏まった著作としては以下の二点である。Lorenz Matzinger, *Onno Klopp (1822-1903): Leben und Werk*, Aurich, 1993; Paul Weßels, „Weiche nicht den Bösen, tritt kühner ihnen entgegen“. *Der Historiker Onno Klopp. Eine biographische Studie auf der Grundlage seiner Tagebücher*, Leer, 2003. また論文には以下がある。Justin Stagl, *Onno Klopp und Karl von Vogelsang*, in: Michael Benedikt, Reinhard Knoll, Cornelius Zehetner (Hrsg.), *Verdrängter Humanismus – verzögerte Aufklärung. Band V: Im Schatten der Totalitarismen. Vom philosophischen Empirismus zur kritischen Anthropologie. Philosophie in Österreich 1920-1951*, Wien, 2005, S. 56-60. Hans Schmidt, *Onno Klopp und die „Kleindeutschen Geschichtsbaumeister“*, in: Albert Portmann-Tinguely, *Kirche, Staat und katholische, Wissenschaft in der Neuzeit: Festschrift für Heribert Raab zum 65. Geburtstag am 16. März 1988*, F. Schöningh, 1988, S. 381-395 (邦訳、ハンス・シュミット、拙訳「オンノー・クロップと『小ドイツ主義・歴史観の創設者たち』」『愛媛法学会雑誌』第42巻第1号、2015年)。1988年以前の文献については、シュミット、前掲論文の注1を参照。
- 7) 邦訳、H・A・ヴィンクラー、後藤俊明・奥田隆男・中谷毅・野田昌吾訳『自由と統一への長い道Ⅰ：ドイツ近現代史1789-1933年』2008年、昭和堂、194ページ。
- 8) 例えば、これまでに9冊出版されたヴェーラー編『ドイツの歴史家』においてもクロップは取り上げられていない。ちなみに総ドイツ主義者と目された歴史家のなかで、同書に取り上げられたのはハインリッヒ・フォン・スルビク (Heinrich von Srbik) である。Cf. Helmut Reinalter, *Heinrich Ritter von Srbik*, in: Hans-Ulrich Wehler (Hrsg.), *Deutsche Historiker*, Bd. VIII, Göttingen, 1982, S. 78-95. 反プロイセン的な歴史観を持つ歴史家としてはシュナー

- ベルが収録されている。Cf. Karl-Egon Lönne, *Franz Schnabel*, in: *ibid.*, Bd. IX, 1982, S. 81-101. 確かに近年でも特定のイシューに関してクロップへ言及されることはある。例えば、クロップはオスマン軍によるウィーン包囲についても著作を残しており (Onno Klopp, *Das Jahr 1683 und der folgende Türkenkrieg bis zum Frieden von Carlowitz 1699*, Graz, 1882), この作品を中心としてクロップが取り上げられることがある。Cf. Burkhard Johannes Wöller, *„Europa“ als historisches Argument: Fortschrittsnarrative, Zivilisierungsmissionen und Bollwerkmythen als diskursive Strategien polnischer und ukrainischer Nationalhistoriker im bsburgischen Galizien*, Diss., Wien, 2013, S. 303 ff.
- 9) 例えば、翌8月10日には、『ノイエ・フライエ・プレッセ (*Neue Freie Presse*)』紙、『ノイエス・ヴィーナー・タークブラット (*Neus Wiener Tagblatt*)』紙、『ノイエス・ヴィーナー・ジャーナル (*Neus Wiener Journal*)』紙が、保守系の新聞では10日夕刊で『ファーターラント (*Das Vaterland*)』紙が経歴と共に死亡記事を掲載した。カトリック系新聞では、11日に『ライヒスポスト』紙が1面から2面にかけて訃報を告げ、その死を悼んだ。
- 10) Mazinge, *op. cit.*, S. 13によれば、『フィガロ (*Le Figaro*)』紙は8月12日に、パチカンの『オッセルヴァトーレ・ロマーノ (*L'Osservatore Romano*)』紙は8月13日に、『ニューヨーク・タイムズ』紙は8月10日に報道した。
- 11) Cf. Abigail Green, *Fatherlands: State-Building and Nationhood in Nineteenth-Century Germany*, Cambridge University Press, 2001.
- 12) Heinrich Ritter von Srbik, *Geist und Geschichte vom Deutschen Humanismus bis zur Gegenwart*, II. Bd., München/Salzburg, 1951, S. 71-73.
- 13) シュナーベルもこの点に関してクロップの意義を強調している。「連邦制はもちろん、過去の事柄であるだけでない。前世紀の中央集権論者と統一主義者-小ドイツ主義的中央集権的王国の開拓者たちと大ドイツ主義的共和主義者たち-が考えたような、国家と社会の、時代遅れで、古臭い理念ではない。／今日われわれが体験しているのは、世界のどれほどいたるところで、-アメリカからインドに至るまで、アフリカ人種の諸民族からソヴィエト連邦まで-諸国民が合州国 (*Vereinigte Staaten*) として構成されているか、ということである。1848年から1918年にかけての中欧の改編において-その発展と国家的形態によれば、巨大な国家連合で結合することがまずもって決定されているように思われた-この新しい秩序形態が見出されなかった、あるいは果たされなかった場合、あるいはもっと正確に言うと、自らで完結する民族体の理念がまさにヨーロッパの諸民族によって受け入れられ、育成された場合、歴史と現代にとってそれがどのような意味を持ったか、という問題を追及することには意義がある。もっぱらこうした状況を通じて、ビスマルクは、小ドイツ的-民族国家的計画をプロイセンの国家思想と結び付け、ドイツとの統一をもっぱらこの方向性で模索し、そして連邦制をほんの少しばかり憲法上容認した。あらゆる民族国家運動の思想共同体-イタリア人マッツィーニはとりわけそのの代表者である-、そして学問と政治的情熱との密接な結びつきは、オンノー・クロップの最も明白な敵対者であり、歴史家であり評論家であるハインリッヒ・フォン・ジーベルの以下の姿勢に

示されている。すなわち、ボヘミアの領域における閉鎖されたチェコ人の民族国家を目指して努力しこれを歴史的に基礎づけようと試みたチェコ人の指導者フランティシェク・バラツキーについてはこれを学問世界における同盟者と見なすのを許したのに対して、大ドイツ主義的歴史家であるコンスタンティン・ヘーフレ（Constantin Höfler）とオンノー・クロップを徹底的に非難したことである。その非難の理由は、後者二人は自分たちの著作においてボヘミアの旧ライヒへの帰属を事細かに、そしてドイツ（人）の生命にとってのあらゆる結果と合わせて研究し、ハンガリーにおけるオイゲン公の業績もきちんと捉えようと望んだ、というものだった。／また別の点でも、オンノー・クロップの連邦制的コンセプトと彼の同志をその内的連関において把握することも必要である。そのコンセプトは、諸民族と諸空間を組織するために、多かれ少なかれ目的になかった形態ではなく、正義の理念（*Rechtsidee*）から生まれたものであり、それなくしては考えられない。一世紀のうちに、あらゆる歴史的経緯が途絶えはじめ、公的精神は完全に非歴史的になったので、－高度に発展した歴史研究において、歴史主義と自然主義の専横に支配された只中で－ほんのわずかな、孤独な思想家だけが、旧ヨーロッパの没落が突如降りかかるのを目の当たりにし、それに対する防波堤を打ち立てようと試みた。自由が正義／権利（*Recht*）からあらゆる者の隷従へと至るということ、このことを彼らはかつての諸民族の歴史から見て取った。彼らが認識したのは、近代の画一化はまさにナショナリズムの結果であり、民族的な集権国家はあらゆる自由と権利を超えて、ある国家文化と平均的な人間類型の育成に着手し、あらゆる諸国の民族主義者は見間違えるほどよく似ている、ということである。このことは19世紀においては、まさに反時代的真理であり、この真理は、進歩への支配的信仰とは相いれなかった。このすべてのことを鋭く述べたオンノー・クロップがかくも多くの敵を作ったというのは、驚くにはあたらぬ！しかし今日、もはや自由主義時代の楽観主義に賛同する人が存在することは許されない。これによって、また、歴史的発展と歴史叙述者の使命についてのわれわれの見解も変化した。過去の事実をありのままに方法論的批判とともに突き止める、ということが歴史家の第一の義務であり、そうであり続けている。しかしここから、過去の事実を類別し、評価するという、歴史家にとってより高い義務が生じ、そしてわれわれのうち誰も今日なお、様々な人物、諸民族、諸国家、諸文化をそれらが取めた成果の優劣をつけようとはしないだろう。確かに次の場合、歴史を書くのはより容易である。すなわち、もっぱら成果に目をやるだけで、より高い価値秩序への諸民族の信仰を歴史的判断の唯一有効な尺度として認識しない場合である。オンノー・クロップは彼の時代の大抵の歴史家よりも深く考察した。彼もまた単純化した。歴史のフォーラムは法廷とは別の種類であり、ここ数世紀のヨーロッパ史は確かに単に崩壊というわけではなく、また同様にもっぱら進歩でもない。」Schnabel, op. cit., S. VIII-X.

14) 古典的な著作としては、Alfred Diamant, *Austrian Catholics and the First Republic. Democracy, Capitalism and the Social Order, 1918-1934*, Princeton University Press, 1960. 邦語では、西川知一『近代政治史とカトリシズム』有斐閣、1977年。

15) カトリック的社会観とヨーロッパ統合運動との関連については、板橋拓己「黒いヨー

ロップアードイツにおけるキリスト教保守派の「西洋」主義」, 遠藤乾・板橋拓己編著『複数のヨーロッパ-欧州統合史のフロンティア』北海道大学出版会, 2011年, 参照。筆者はかつてシュシュニクについて, その国内政治理論としての職能身分制国家論と, 対外政治理論としてのライヒ論との関連を考察したことがある。参照, 拙著『オーストリア国民意識の国制構造-帝国秩序の変容と国民国家原理の展開に関する考察』晃洋書房, 2013年。

- 16) Georg Franz-Willing, *Erzherzog Franz Ferdinand und die Pläne zur Reform der Habsburger Monarchie*, Brunn / München / Wien, 1943, S. 9; Ludwig Jedlicka, *Erzherzog Franz Ferdinand (1863-1914)*, in: Hugo Hantsch (Hg.), *Gestalter der Geschichte Österreichs*, Innsbruck / Wien / München, 1962, S. 528, 530; Friedrich Weissensteiner, *Franz Ferdinand: Der verhinderte Herrscher*, Wien, 2007, S. 64 f.; Jean-Paul Bled, *Franz Ferdinand: Der Eigensinnige Thronfolger*, Böhlau, 2013, S. 42 f.; Alma Hannig, *Franz Ferdinand: Die Biografie*, Amalthea, 2013, S. 25, 122. クロップはフランツ＝フェルディナント大公の他にも家庭教師を務めたが, その中には, カトリック系の歴史家で, ローマ教皇伝の執筆者として著名な, ルートヴィヒ・フォン・パストール (Ludwig von Pastor: 1854-1928) もいた。
- 17) ザイベルの改編案については, 前掲拙著, 参照。
- 18) ポポビッチとホジャについては, 福田宏「ミラン・ホジャの中欧連邦構想: 地域再編の試みと農民民主主義の思想」『境界研究』3, 2012年, を参照。
- 19) Hannig, *op. cit.*, S. 99-103.
- 20) 「ヤコブ・ブルクハルトの戦争体験 1866-1871」ヴェルナー・ケーギ, 坂井直芳訳『小国家の理念-歴史的省察』中央公論社, 1979年, 408-409ページ。
- 21) 同上, 205ページ。
- 22) Mazinger, *op. cit.*, S. 15.